

紅葉

くれなゐもゆる
KYOTO
UNIVERSITY
MAGAZINE

第6号

京都大学広報誌





旧農学部附属演習林
本部事務室

アーヴィング
大英
米大
見ツ

新たな哲学を育む場

吉

田キャンパスには国の文化財として登録されている建築物が十棟ある。その一つが北部構内の中央にある。それはバンガロー風のモダンな木造建築、旧農学部演習林本部事務室である。案内してくださったのは、大学院地球環境学堂の小林正美教授（工学博士）。

風、景観、人の交わり

この建物は、一九二〇年創設の京都帝国大学建築学科を第一期生で卒業した大倉三郎が、京都帝国大学營繕課技師のときに設計、一九三一年に完成させたものです。非古典系の軽快な木造の洋式建築で、一九〇〇年頃ドイツやオーストリアで流行した芸術様式のユーゲントシュティール（ドイツ語で「青春様式」、アール・ヌーボー様式のドイツ語圏の呼名）を感じさせます。一九二三年に開設され

た京都帝国大学農学部も、当時のドイツ農学を建学の精神にして発足しましたと聞いています。

「高温多湿の日本の風土には高床の伝統を生かし、靴と椅子の西欧式の教育システムには、屋根構造にボルト締めのトラス小屋組みを採用し、天井の高い梁間の大きな空間を確保しています。そのことによって室内でも風を感じ、ベランダも風が良くなれる設計になっています。門からボーチに向って入っていく角度は四十五度（北西）、右手に比叡山を見ます。まわりの景色を取り入れながら、まわりと共に存する建物に設計されています。京都大學を庭、まわりの山並みをランドスケープにしたデザインといつていいでしょう。また、パロック庭園を模した本部試験地の側から入ると、導線や軸線が直交しないように、建物の軸をふつてゆるやかなアプローチでまと



►1931（昭和6）年建築の旧本部事務室。木造建築であるが、当時のヨーロッパの考え方を巧みにとりいれ、周囲の景観とも調和している。京都帝国大学營繕課の大倉三郎の設計

◆ゆったりとした感のある、本部試験地側からの入口

め、真っ直ぐではお互いに対立するまわりを、なじませるようにつないでおり、肩に力を入れずに通れます」。

「京大のシンボルである時計台は、正門から入ると真正面に聳えるように対峙します。前には楠がありますが、

大学での中心性や権威を象徴するため、シンメトリーに、まわりの力をを集めるように設計しています。いわば『言うことを聞きなさい！』、とで

もいう理念でしょうか。これに対してこの建物からは、自由を尊ぶアカデミックな人たちが、気持ちよく研究で

き、学生と一緒に学ぶという理念を感じられます。当時のドイツは、一部の支配階級の建築から人びとの建築へといふ、バウハウスの造形教育が勃興した時期もあります。こうした世界の潮流が、クラシックな様式から新しい様式に移る過渡的に表出した意匠によつても示されています」。

「この建物に感じる、のどかさや風通しの良さを大事にしていきたいと思います。それは、外に開かれた国際性の考え方があるからこそ表現されているものだと思います。ですかね、水と木を基調とした京大のこれから、北部再開発の要に、まさにふさわしい建築なのです」。

森と里と海のつながり

つぎに、フィールド科学教育研究センターの竹内典之教授（農学博士）

に演習林の話を聞いた。竹内教授が

演習林教官になつた一九七一年当時は、演習林には財産林としての性格

が強く残つており、研究とともに大規模な事業もやつていてから、研究室、事務室、会議室、さらに業務事務室として使われていました。演習林は創設期には大学資金確保（大学財政独立）のために取得されました」。

時系列でおつていくと、一八九七年京都帝国大学開設、一九〇九年に台湾総督府から台湾演習林が移管され、一九一二年に朝鮮演習林、一九一五年に樺太演習林、一九二一年に芦生演習林（京都府）が設置され、一九二三年、農学部創設とともに農学部附属演習林となつた。「大学の資金源なので演習林本部は時計台の建物内にありました。収入をあげていたので、北部構内に本部事務室の建物がつくられました」。第二次世界大戦の敗戦で「外地演習林」は消滅したが、北海道演習林などが設置された。

「採用になつてすぐ、この事務室に挨拶にきました。次の日に北海道に赴任したので、この本部事務室には年に二、三度くるくらいでした。一九七〇年代なかばまでは大々的に演習林の伐採をしていました。ですから、事業は大量にあつたわけです。演習林の野球チームもありました。その後、演習林は伐採面積の縮小、合理化の対象となり、一九七九年に事務

室は農学部総合館に移転した。

竹内教授の研究テーマは林業工学（林道計画）から森林資源管理学（人工林の管理）へとシフトしてきた。「もともと林業は、都市の文化と連関したものでした。ところが、日清・日露戦争あたりから林業は原材料供給部門におしこめられてしまつたのです。江戸末期に人工林は五十万ヘクタールほど。今は森林面積の四割、一千万ヘクタールが人工林です。第二次世界大戦時の乱伐で土砂災害が次々と発生し、国をあげての緑化がすすめられました。高度経済成長時には生産力増強をめざして拡大造林がおこなわれましたが、植えられたのは換金対象の杉、檜ばかりで、モノカルチャーな森林になつています」。

今、竹内教授やフィールド科学教育センターが強調しているのが「森と里と海のつながり」である。環境保全を三域の連環のなかで考えようとするものである。



►心地よい風が通るベランダの天井の意匠には、モダニズムの息吹きが感じられる。ベランダの柱はギリシャや唐招提寺のような円柱ではなく、角柱で力強さを表現し、さらに鉄で補強している